

海外だより

McGILL 大学

田中重典*

モンレア (英語でモントリオール) の放送があり、列車は地下中央駅に入つていった。駅に降り表に出ると、そこは高い建物がならぶモントリオールの中心街である。北に向かつて歩き、賑やかな通りを横切るとモントリオールの名前の由来になつた Mount Royal という小高い丘が姿を見せ、その麓に古い石造りの建物群が現われる。それが McGILL 大学でフランス系の街にある英語系の大学である。

モントリオールは北海道の旭川と同じ緯度にある。冬は長くて厳しく、日中の気温がマイナス 10 度を下回る日も 2 か月近く続く。この寒い気候の中、16 世紀からヨーロッパ人によるビーバーの捕獲とその毛皮の貿易が盛んであつた。1821 年にマギール大学を創設した、英国人の H. J. McGILL もそのような貿易で富を得た毛皮商のひとりであつた。

1. McGILL 大学 金属工学科

最初 100 人の学生で始まつたこの大学は、現在では 20000 人の学生を有する総合大学へと拡大してきた。この中の、マギール大学工学部には、5 つの Department と 2 つの School がある。一般的なことであるがカナダの大学の研究室は企業との関係が密接であり、周辺の工業地域と対応して幅広い研究や教育が行われている。

マギール大学周辺の鉱工業としては、オンタリオ湖や、エリー湖の、いわゆる、五大湖周辺に STELCO, DOFASCO などの、高炉を持つた製鉄所があり、オンタリオ州とケベック州の境では、金、銀、銅 (NORANDA などの会社も有名) が、古い火山地層から産出される。また、ケベック州では、豊かな水源を利用した、水力発電による、アルミニウム、鋼の精錬が行われている。アルミニウムの大手会社である ALCAN の本社もモントリオールにある。これら企業は他の産業、例えば、自動車や電機、と比べてほとんどがカナダ資本である特徴を持つ。

鉄鋼や非鉄金属プロセスの研究はこのような環境の中、Dep. of Mining & Metallurgical Engineering においておこなわれている。

鉄鋼に関する研究は 1967 年より、Prof. DARVENPORT (現ミズーリ大学)、GUTHRIE, JONAS によつて開始された。現在では高炉、転炉、連铸、圧延に至る研究が 7 人の教授、教官を核になされている。最近では、Prof. GUTHRIE を中心にして Prof. ARGYROPOULOS, MUCGIARDI らによる、製鋼工程における、合金添加時の溶

解挙動、レードル、タンディッシュ内の流動解析や介在物挙動、上底吹転炉内の混合特性、およびスラグ層の溶鋼中への巻込み挙動などの研究が、また、Prof. JONAS, AKEBEN らによつて圧延時の再結晶や析出挙動などについての研究がなされている。また、最近の鉄以外の研究では Prof. GUTHRIE が ALCAN と共同で開発したアルミニウム铸造時の介在物量直接測定装置が注目される。

鉱工業の多くの企業が大学の近くにあるためか、研究費の援助や、学生の就職には恵まれているようであり、大学院でも金属工学科の学生の多数は奨学金を受けていた。

なお、大学院教育の重点は在学中に実験や解析の腕を磨くこと、すなわち、座学より独創性のある研究をすることに、置かれている。しかし、講義も受けなければならず、学生は講義と実験で忙しい毎日を送つていた。

学生の種類は、イギリス系カナダ人とフランス系カナダ人、北米にある他の大学と同様の現象であろうが、各国からの留学生と多様である。マギール大学は、フランス語の街にありながら、英語系の大学としての歴史が長いいためか、授業や論文は英語が使用されている。しかし、フランス語の論文提出も認められており、また授業中に学生がフランス語で質問して教官が英語で答え、これがバイリンガル授業であると思つたこともあつた。

2. フランス系カナダ

バイリンガル授業は、もちろん、モントリオールがフランス系カナダの街であり、英語を用いているマギール大学がその中にあることに起因している。フランス系カナダの歴史は複雑であり、17 世紀、フランスとイギリスからの移民が行われたことに始まる。その後の、1758 年の両国間の植民地戦争でのイギリスの勝利と、引き続き英国のフランス住民支配の期間に、フランス系カナダ人の中に不満と独立の気運が高まつたようである。そして、1976 年、独立を旗頭にしたケベック党が成立し、公用語はもとより道路標識から街の看板にいたるまでフランス語の街が誕生した。イギリス系の住民の一部は英語圏のオンタリオ州に流出し、ますますフランス語色が強くなつた訳である。

実際に、両住民の間には、無言の対立があるらしい。モントリオールの市街地は、中央はユダヤ人、イタリア人などの商店街が位置し、その東側はフランス系住民、西側はイギリス系住民が住んでいる。また、宗教的にカソリックとプロテスタントの違いがある。一昨年、ローマ法王とエリザベス女王のカナダ訪問があつた際、ローマ法王はケベック州でカソリック信者であるフランス系住民から会場へ向かう列車の到着も遅れるほどの熱狂的な歓迎を受けたが、女王はケベック州は素通りして、独立戦争の時、イギリスに忠誠を尽くして合衆国から移つ

* 新日本製鉄(株)製鋼研究センター

てきた、忠誠派と呼ばれる人達の子孫が残っているオンタリオ州で暖かく歓迎された。

しかし、最近ではフランス系住民の中の特に若者の間で新しい風潮、すなわち、独立論争を好まない考えが現れ始めている。その原因の一つにはフランス系の住民の80%までが英、仏語の両方が使えるバイリンガリストになり、英語への嫌悪感が薄らいだことと、英語圏経済社会から取り残されたケベック州の経済状況の悪化により、独立よりも職業をといった世論が高まったためである。そのため、1976年よりケベック党を率いてきた党首のレベスク氏が辞任し事態も新たな展開を始めている。

3. カナダ——多民族国家

カナダのもう一つの特徴は英、仏両住民の他にさまざまな国から来た人々が多数いることである。これは豊かな資源の割りに人口が少ないことに起因した、カナダの積極的な移民政策の結果であり、大学内はもちろん、街でもさまざまな言葉が聞かれ、各国のレストランでは、各国の味が楽しめた。

多民族国家であるカナダでは多くの人とコミュニケーションを保つためには、少なくとも二種類の言葉を使わなければならない。政府の刊行物はもちろんデパートの宣伝も英語とフランス語で書かれている。テレビを見ればロックとシャンソンが聞かれ、政治演説も話している途中で突然、英語からフランス語に切り替わるという複雑さである。一昨年に行われたカナダの首相選挙もバイリンガルの国であることを示す好例であつた。長年、続いたリベラルのトルドー首相が退任した後、次期首相を選出するため、リベラルからはバンクーバー出身の若き官僚、ターナー氏が、対する保守党からはケベック州の小さな漁村出身のマルローニ氏が出馬して、激しい選挙戦が繰り広げられた。結果としては、父方がアイルランド系、母方がフランス系であるマルローニ氏がフランス

語の方言まで用いた巧みな話術で広い支持を得て、圧倒的多数で首相に選出された。バイリンガルの国を治めるにはバイリンガリストの方が、やはり意思伝達が容易なようである。

カナダ人から見れば言葉が一つである日本が羨ましくも映るらしい。確かに、情報の伝達は日本の方が容易である。例えば、交通標識に書かれている文字の意味がわからず事故をおこすようなことは、日本では滅多に無い。反面、たくさんの民族が集まって国を作っていることにも利点があろう。すなわち、第一にこのような環境で複数の言語を習得できれば、種々の情報を速く、かつ正確に掴むことができる。第二に、各個人は、それぞれ、生れ故郷の思考方法を持っている。例えば、ギリシャ系の人、アリストテレス以来の調和を基調にした考えを、イギリス系の人、実証主義的な思考を、ラテン系の人、時間に捕われないおおらかな考え方を、インド人は、悠久な哲学を考えるような顔で仕事をしている。これらの思考を合わせて仕事をしたら、どのような発想が生まれるであろうか。おそらく、日本人から見たら、形に捕われないユニークな考えが出てくる可能性が高いのではないだろうか。単一言語社会で暮らしていた私にとって、このような社会での生活は貴重であつた。

4. 終わりに

現在、話題になつているようにカナダでは自動車、カメラ、電気製品など日本製品が氾濫していた。しかし、一昨年の統計ではカナダの対日貿易は黒字であつた。日本への帰路への途中、ケベック州の湖地帯、五大湖、その西に広がる大草原、ロッキー山脈と眺めていくうちに、自然がもたらす豊かな資源によつてこの国の経済が潤っていることを実感した。合衆国と協調しながらも主体性を持つて進んでいる国、カナダ。自然から与えられた富みを基盤に今後もさらに発展することだろう。